探檢實記　地中の秘密

權現臺の懷古

江見水蔭

青空文庫

——初めての發掘——權現臺の歷史——貝層より石棒——把手にあらで土偶——元日の初掘り——朱の模樣ある土器——奇談——珍品——地主と駄菓子——鷄屋の跡——

太古遺跡の發掘に、初めて余が手を下したのは、武藏の權現臺である。それは余の品川の宅から極めて近い、荏原郡大井の小字の事。東海道線と山の手線と合して居る鐵道線路の右手の臺地がそれで、大井の踏切から行けば、鐵道官舍の裏から畑中に入るのである。

余は併し大概蛇窪の踏切の第二の線を越して、直ぐと土手に登つて行くのである。

初心の發掘としては此の權現臺は大成功であつた。無論遺物が豐富でも有つたのだが、宅から近いので、數々行き得られたのと、人手が多かつたのも勝利の原因であつた。

されば余として、終生忘るゝ事の出來ぬのは、この權現臺の遺跡で、其所の地を踏む時は勿論、遺物の一片を手にしても、直ぐと其當時を思出すのである。成功した其時の嬉しさも思出でるが、併し多くは其時一處に行つた友の、死んだのや、遠ざかつたのや、いろ〳〵それを懷出して、時々變な感情に打たれもする。

三十五年の九月、日は忘れたが初旬であつた。それが權現臺最初の發掘で、其頃余の宅は陣屋横町に在つて、活東望蜀の二子が同住して居た。後に玄川子も來た。

文土相樸が盛んな頃なので、栗島狹衣氏が殆ど毎日の樣に來て居たので、狹衣子と同じ朝日新聞に居る水谷幻花氏も、其縁で遊びに來出した。

今日は天氣が快いからとて、幻花子が先導で、狹衣、活東、望蜀の三子が、鍬を擔いで權現臺に先發した。後から余も行つて見ると、養鷄所の裏手の萱原の中を、四人て連りに掘散らして居る。なる程貝塚とは這んな物だなと初めて余は地中に秘密あるを知つた。

此時分の發掘法といふのは、幼稚なもので、幻花子はハンマーでこつこつ掘つて、布呂敷で貝殻を濮ひ出す位ゐ。

二回目には矢張人數で、此方は※や、鍬で遣つて見たが、如何も巧く行かぬものだから、三回目には汐干の時に用ゐた熊手（小萬鍬）が四五本有つたのを持出した處が、これが非常に有効であつたので、（勿論先輩中、既に小萬鍬を用ゐて居た人が有つたさうだが、それは三本爪の、極めて小なる物）前の鍛冶屋に四本刃の大形のを別誂へするなど、大分乘氣に成つて來た。（箕も其頃から遣ひ出した）

といふのが、幻花子が、小魔石斧や、完全に近い土器などを掘り出したので、余等の發掘熱がそろ〳〵高度に達しかけたからである。

休日毎に誘ひに來る幻花子を待つて居られず。今日は望生、翌日は活子、或は三人揃つて行く間に、土偶の足も出る。小土器も出る。大分景氣が附いて來た。

並んで掘つて居る望生の膝頭が泥に埋つて居るのを、狹衣子が完全な土器と間違へて掘出さうとすると、ピヨイと望生が起上つたので、土器に羽根が生えたかと驚いたのも其頃。

活東子がゴホン〳〵咳をしながら、赤土の下まで掘入つて、何も出ないと零したのも其頃。

初心の失策は決して少くなかつたのだ。

幻花子は此當時、ぐツと先生振つて、掘りながら種々講釋を聞かせるのであつた。余等が最も興味を有して傾聽したのは、權現臺貝塚の歷史であつて、最初に野中完一氏が發見したのを、氏は深く秘して居たので、其頃は發掘をせずとも、表面をチヨイ〳〵掻廻して見れば、土偶、土版、完全に近い土器など、ごろ〳〵轉がり出し、磨製石斧などは、いくらでも有つた。それを幻花子がチラと耳に挾んで、大井村中殘らず探して、漸く野中氏の寶庫を突留めると間もなく、貝塚の一部を開いて其所に養鷄場を設立する大工事が起り、此期を利用して土方を買收し、幻花子が種々の珍品を手に入れた事から、地主との衝突奇談、小作人との大喧嘩、小南保之助氏と貝塚の奇遇談やら、足立博士の未だ學士時代に此所へ來て蜂に螫された話やら、却々面白い。

但し斯ういふ話の出た時は、餘り遺物の出ない時で、土器の顏でも貝層から出やうものなら、呼吸をするのさへ忘れる位。

活東子が十月卅一日に鐵鉢形の小土器を掘當てながら、過つてそれを破つたので、破鐵鉢の綽號を取りなどしたが、それと同時に出した把手附の小土器は、少し缺けては居るが珍形で、優物たるを失はぬ。（第壹圖イ參照）

第壹圖（武藏權現臺）

イ（土器）　ロ（土偶顏面）　ハ（土偶胴部）

斯うして殆ど毎日の如く掘つて居る間に、萱原を三間幅で十間ばかり、南から北まで掘進んで、畑の方まで突拔けて了つた。（高杯形、茶椀形、土瓶形、大小土器十餘種。石劍片、石槍、貝輪、輕石製浮標等出づ）

これは大變と、總掛りで地ならしをして、今度は又思ひ思ひに陣を取り、西から東に向つて坑道を進め掛けた。

此間にチヨイ〳〵飛入の發掘者が見えた。野中完一氏、伊坂梅雪氏、小南保之助氏、高橋佛骨氏等。

十二月の四日であつた。余と幻花子と二騎、轡を並べて掘つて居ると。

『江見クン、出た〳〵』と幻子が變な聲を出した。

何が出たかと覗いて見ると、眞白い貝層の中から、緑泥片岩の石棒の頭部が見え出して居る。

それが横一文字に貝層の間に挾まつて居るのを。

『未だ有る、未だ有る』と幻子は調子を取りながら掘つて行くので、見て居るに耐えぬ。

殘念でならぬので、自分の持場を一生懸命に掘つたけれど、何も出ない。幻子の大成功に引替へて大失敗。活望二子も茫然として了つた。

其翌五日、奮然として余は唯一人で行つた。寒い風が吹き、空の

曇つた、厭な日であつたが、一人で一生懸命に掘つたけれど、何も出て來ぬ。晩まで掛つて漸く土器の端でも磨つたらしい石と、把手の平凡なのを二三箇得たばかり。がツかりして歸つて、食卓につきながら、把手の一箇を家人に示して、これが責めて土偶の顏でも有つたら、昨日の敗軍を盛返へすものをとつぶやくと、脇で見て居た母が『おや〳〵それは人形の顏ではなかつたのか』といふ。『へえ、人形の顏だと好いのですが、然うではないのです』と余は答へた。

母は重ねて『でも妾には人形の顏に見える』余『然うですな、これが眉毛で、これの下に眼があると好いのですが』と言ひつゝ、小揚子でツゝくと、土が、ポロリと落ちて、兩眼が開いた。おや〳〵と思ひながら、又ツゝくと、鼻の孔さへ二ツ開いた。正しく土偶の顏面なのであつた。（第壹圖ロ參照）

それから又調子附いて、雪中雨中構ひ無しに掘つて、三十五年の十二月三十日、棹尾の成功としては望蜀生が、第貳圖ロの如き口唇具を出した。朱塗である。

最も振つて居たのは三十六年一月元旦で、此日年始に來た幻花子は、掘初めをすると云つて唯一人で出掛けたのを、後から、靜灣、佳水、天仙、望蜀、古閑、狹衣、活東の七人と評議の上、二人宛四方から進んで、穴に籠る幻子を包圍攻撃して遣らうといふので、それ〳〵に手配りしたが、活東子が不間を遣つて、却つて幻花子の方から突貫し來つたのであつた。

其時の八人の内で、活東天仙古閑の三子は、今は現世の人であらぬ。

三十六年に入つて余は大成功をした。一月十六日には、土器に朱を以て緻密なる模様を畫いてあるのを、二箇まで掘出した。それから四十二年の今日までに斯くの如き珍品は又と出でずに居る。余が藏品中の第一位を占めて、未だ一歩も下らずに居る。

それから、土器も種々出た。奇談も種々有つた。

貝をさらひ出すのに就て、活東子と幻花子と衝突する。發掘の進路に就て衝突する。狹衣子が手傳ひに來ては、つい、社に出る時間を忘れた事や、佛骨子が穴の中で午睡をした事や、これ等は奇談の主なるもの。

發掘品としては三十六年三月十九日に、活東子が方形裏模様の土器を出し、望蜀生が、同二月二十二日に壺形土器を出し、玄川子が土偶の足と、第二圖ニの如き、珍らしく複雜なる把手を出し。余が又土偶の足、半磨石斧、三月二十二日に獸牙製曲玉の一種、略してキバマガ（第二圖ハ參照）を出し、同月二十六日に、鹿角製浮袋の口（第二圖イ參照）を出し、四月三日に土偶胴部（第壹圖ハ參照）を出した等が主なる物。

第貳圖（武藏權現臺）」

イ（浮袋口）　ロ（口唇具）　ハ（牙曲玉）　ニ（把手）　ホ（有孔石器）

此間に望蜀生は故郷に歸り、活東子又振はず。幻花子は相變らず。それと玄川子を相手にぼつ〳〵掘つて、到頭鷄屋の塀の下まで掘り進んで、夏の頃には既う手の附け場所が無くなつた。

思出して見ると未だ奇談があつた。母や妻や親類の子供や、女中や、遠くも無いので摘草かた〳〵見物に來た事が有つた。其時は生憎何も出ないので、採集袋へ摘草を入れて歸つた事もあつた。

最も奇談とすべきは地主の某氏が來た時である。とは知らぬので貝を揚げるのに邪魔だから、其所を退いて呉れなんて威張り散らして、後で地主と分つて、有合せの駄菓子を出して、機嫌を取つた事などである。

やがて其秋には、殘らず貝塚は開かれて、畑と成つて了つたが、それでも余等は未練に引かされて、表面採集に時々立寄るが、其後とても、土偶を得、磨石斧を得、三十七年の九月には、第二圖ホの如き有孔石器をさへ表面で得た。これは曲玉の一種でもあらう。

これだけ荒した權現臺は、其後幾變遷して、以前の樣は既う見られぬ。四十一年の夏行つて見ると、彼の鷄屋さへ失くなつて了つて居る。幻花子は鷄屋の出來ぬ前から知つて居るのだ。余が知つてからも三四代主人が變つたのであつた。

二代目の時代の鷄屋の番人に好い老人が居て、いろ〳〵世話をして茶など入れて呉れて居たが、其老人間もなく死んだので、何んとなく余は寂寞を感じたのであつた。それから三代目四代目とは、無關係で、構内へは一歩も足を踏入れなかつたが、到頭その鷄屋は亡びて了つたので、これを幸ひと佛骨子をかたらひ、又少し掘つて見た。それでも土器が一ツ、磨石斧が一本出た。

此後權現臺は如何變るだらう。

初めて萱原に分入つた時に居た活東子は死んだ。望蜀生は如何したのか、寄りつきも仕ない。狹衣子は役者に成つて、あの泥を漾つた手でお白粉を解きつゝあり。幻花子も新聞の方が忙しいので、滅多に來ず。自分一人で時々掘り始めの處へ立つては、往事を追懷すると、其時の情景が眼前に彷彿として見えるのである。が——既う直きに其處は人の屋敷内にでもなつて、垣から覗く事も出來なくなるだらう。

纔かに五六年で地上は此變化である。地中の秘密はそれでも、三千餘年の間保たれたと思ふと、これを攪亂した余等は、確かに罪惡であると考へずには居られぬのである。

青空文庫情報

底本：「探檢實記　地中の秘密」博文館
1909（明治42）年5月25日発行
※国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。
※「思出《おもひいだ》」と「懐出《おもひいだ》」、「其所」と「其處」、「第貳圖」と「第二圖」の混在は、底本通りです。
※「其頃」に対するルビの「そのころ」と「そのごろ」、「養鶏」に対するルビの「やうけい」と「ようけい」、「貝塚」に対するルビの「かひづか」と「かいづか」、「小萬鍬」に対するルビの「せうまんぐわ」と「せうまんくわ」、「貝層」に対するルビの「かひさう」と「かひそう」、「望蜀」に対するルビの「ぼうしよく」と「ばうしよく」、「老人」に対するルビの「らうじん」と「ろうじん」の混在は、底本通りです。
※誤植を疑った「初心《しよしよ》」を、本文中の他の箇所の表記にそって、あらためました。
入力：岡山勝美
校正：岡村和彦
2019年10月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

探檢實記　地中の秘密

権現臺の懐古

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　江見水蔭
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/